

平成27年度 病害虫発生予察情報

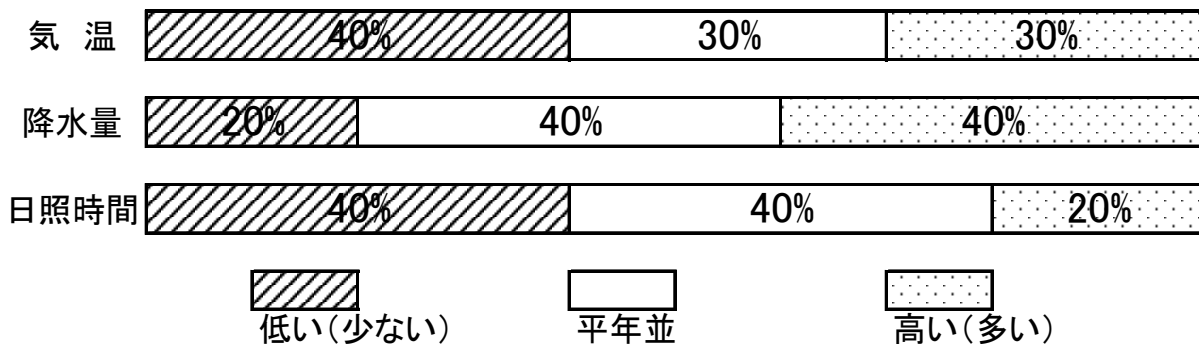
発生予報第4号（7月）

平成27年6月26日
島根県

予報の概要

区分	農作物名	病害虫名	予想発生量		
普通作物	イネ	葉いもち	平年並		
		紋枯病	平年並		
		縞葉枯病	平年並		
		萎縮病	平年並		
		黄化萎縮病	平年並		
		ヒメトビウンカ	やや多い		
		ニカメイチュウ	やや多い		
		ツマグロヨコバイ	平年並		
		セジロウンカ	平年並		
		トビイロウンカ	平年並		
		コブノメイガ	平年並		
		斑点米カメムシ類	やや多い		
		イネツトムシ	やや多い		
		果樹	ナシ	黒斑病	やや少ない～平年並
				黒星病	やや多い～多い
シンクイムシ類	平年並				
ハマキムシ類	平年並				
ハダニ類	平年並				
アブラムシ類	やや少ない				
カキ	円星落葉病			平年並～やや多い	
	カキミガ			平年並	
果樹全般	カメムシ類			やや少ない	

中国地方1か月予報(6月27日～7月26日・広島地方气象台6月25日発表)
<向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%)>



A. 普通作物

- 1) イネ
 - (1) 葉いもち
- 予報内容
発生地方 県内全域
発生時期 平年並

- 発生量 平年並
- 予報の根拠
- ① 6月1～3日に実施した置き苗の調査（1069圃場対象）で発病苗率は0.4%であった。（平年の置き苗の発病苗率0.4%）。
 - ② 6月下旬の巡回調査で本田での発生は認めなかった（平年の発生ほ場率0.1%）。
 - ③ 常習発生地では育苗箱施薬の実施率が高い。
 - ④ 向こう一か月の気象は本病の発生にやや助長的である。
- (2) 紋枯病
- 予報内容
- 発生地方 県内全域
- 発生時期 平年並
- 発生量 平年並
- 予報の根拠
- ① 前年、発病程度の高いほ場があり、このようなほ場では越冬菌量が多い。
 - ② 6月下旬の巡回調査で本田での発生は認めなかった（平年の発生ほ場率2.4%）。
 - ③ 常習発生地の一部では育苗箱施薬が行われている。
 - ④ 向こう一か月の気象は本病の発生をとくに抑制しない。
- (3) 縞葉枯病
- 予報内容
- 発生地方 県内全域
- 発生量 平年並
- 予報の根拠
- ① 媒介虫のヒメトビウンカの発生量はやや多いと予想される。
 - ② 近年の保毒虫率は低い。
- (4) 萎縮病
- 予報内容
- 発生地方 常習発生地
- 発生量 平年並
- 予報の根拠
- ① 媒介虫のツマグロヨコバイの発生量は平年並みと予想される。
 - ② 近年、本病の発生は極めて少なく、保毒虫率は低いと考えられる。
- (5) 黄化萎縮病
- 予報内容
- 発生地方 常習発生地
- 発生量 平年並
- 予報の根拠
- ① 近年、本病の発生は少ない。
 - ② 向こう一か月の気象は本病の発生をとくに抑制しない。
- (6) ヒメトビウンカ
- 予報内容
- 発生地方 県内全域
- 発生量 やや多い
- 予報の根拠
- ① 6月下旬の巡回調査では、捕獲数は0.8頭/50株（平年0.5頭）、発生圃場率は45.0%（平年16.3%）で発生量は平年に比べやや多い。
 - ② 出雲市の予察灯では5月23日、ネットトラップでは6月1、8、17日に誘殺された。誘殺時期は平年に比べ早く、誘殺数は平年に比べやや多い。
 - ③ 6月下旬までに捕獲した成幼虫のイネ縞葉枯病ウイルス保毒虫率は0.6%と低い。
 - ④ 向こう一か月の気象は本種の発生を特に抑制する要因とはならない。
- (7) ニカメイチュウ（第1世代）
- 予報内容
- 発生地方 県内全域
- 発生時期 平年並
- 発生量 やや多い
- 予報の根拠
- ① 6月下旬の巡回調査では、被害株率は0%（平年0.2%）で発生量は平年並みである。
 - ② 予察灯、フェロモントラップにおける誘殺数は平年に比べやや多い。
 - ③ 向こう一か月の気象は本種の発生を特に抑制する要因とはならない。

(8) ツマグロヨコバイ

予報内容

発生地方 県内全域

発生量 平年並

予報の根拠

① 予察灯における誘殺数は平年と比べやや少ない。

② 6月下旬の巡回調査では、捕獲数は1.4頭/50株（平年2.7頭）、発生圃場率は20.0%（平年39.7%）で発生量は平年並みである。

③ 向こう一か月の気象は本種の発生を特に助長する要因とはならない。

(9) セジロウンカ

予報内容

発生地方 県内全域

発生量 平年並

予報の根拠

① 初飛来は6月11日に隠岐の島町の予察灯で誘殺された。6月25日までに出雲市の粘着誘殺灯、ネットトラップ、益田市の予察灯では誘殺されていない。

② 6月下旬の巡回調査では、捕獲数は1.1頭/50株（平年3.9頭）、発生圃場率は30.0%（平年42.9%）で発生量は平年並みである。

③ 向こう一か月の気象は本種の発生を特に助長する要因とはならない。梅雨明けまでは多飛来に注意が必要である。

(10) トビイロウンカ

予報内容

発生地方 県内全域

発生量 平年並

予報の根拠

① 6月25日までに予察灯、粘着誘殺灯、ネットトラップで誘殺されていない。

② 6月下旬の巡回調査では圃場での発生は認められない。

③ 向こう一か月の気象は本種の発生を特に助長する要因とはならない。梅雨明けまでは多飛来に注意が必要である。

(11) コブノメイガ

予報内容

発生地方 県内全域

発生量 平年並

予報の根拠

① 6月25日までに予察灯、粘着誘殺灯、ネットトラップで誘殺されていない。

② 6月下旬の巡回調査では圃場での発生は認められない。

③ 向こう一か月の気象は本種の発生を特に助長する要因とはならない。梅雨明けまでは多飛来に注意が必要である。

(12) 斑点米カメムシ類

予報内容

発生地方 県内全域

発生量 やや多い

予報の根拠

① 6月下旬の圃場周辺雑草地でのすくい取り調査では、斑点米カメムシ類合計で9.5頭/20回振り（平年6.6頭）、発生圃場率は57.5%（平年66.5%）で発生量は平年に比べやや多い。主要種はアカスジカスミカメである。

② 向こう一か月の気象は本種の発生を特に抑制する要因とはならない。

(13) イネツトムシ

予報内容

発生地方 県内全域

発生量 やや多い

予報の根拠

① 6月下旬の巡回調査では、被害株数は0.3株/50株（平年0.4株）で平年並み、発生ほ場率は20%（平年7.4%）で平年と比べ多い。

② 向こう1か月の気象は本種の発生を特に抑制する要因とはならない。

B. 果樹

1) ナシ

(1) 黒斑病

予報内容

発生地方 ナシ（二十世紀）栽培地帯
発生量 やや少ない～平年並

予報の根拠

- ① 6月下旬の巡回調査では、発病葉率3.6%（平年6.4%）であり、発生量は平年に比べてやや少ない。
- ② 向こう一か月の気象は本病の発生にやや助長的である。

(2) 黒星病

予報内容

発生地方 県内全域
発生量 やや多い～多い

予報の根拠

- ① 6月下旬の巡回調査では、発生圃場率は50%（平年41.1%）と平年並みであるが、発病葉率は2.6%（平年1.0%）と高く、発生量は平年に比べてやや多い。
- ② 向こう一か月の気象は本病の発生にやや助長的である。

(3) シンクイムシ類

予報内容

発生地方 県内全域
発生時期 平年並
発生量 平年並

予報の根拠

- ① フェロモントラップ（安来市、出雲市）でのナシヒメシンクイ雄成虫の誘殺時期は平年並み、誘殺数は平年並みである。
- ② 向こう一か月の気象は本種の発生を助長する要因とはならない。

(4) ハマキムシ類

予報内容

発生地方 県内全域
発生時期 平年並
発生量 平年並

予報の根拠

- ① 県予察圃場（出雲市）のフェロモントラップにおけるハマキムシ類雄成虫の誘殺時期は平年並み、誘殺数は平年並みである。
- ② 向こう一か月の気象は本種の発生を特に助長する要因とはならない。

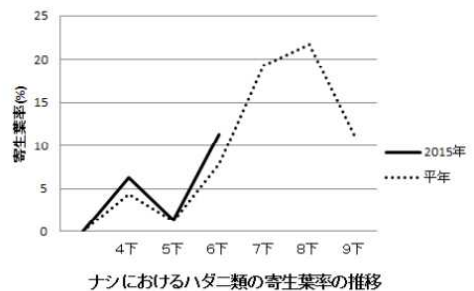
(5) ハダニ類

予報内容

発生地方 県内全域
発生量 平年並

予報の根拠

- ① 6月下旬の発生量は寄生葉率11.3%（平年7.8%）、寄生虫数22.5頭（平年18.9頭）と平年並みである（グラフ参照）。
- ② 向こう一か月の気象は本種の発生を特に助長する要因とはならない。



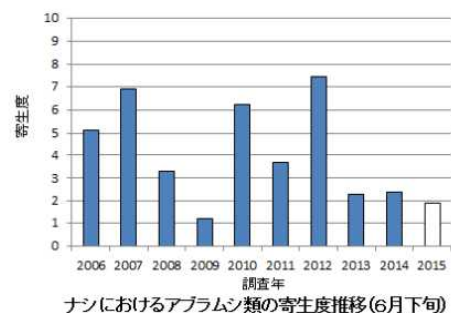
(6) アブラムシ類

予報内容

発生地方 県内全域
発生量 やや少ない

予報の根拠

- ① 6月下旬の発生量は寄生新梢率4.4%（平年9.8%）、寄生度1.9（平年4.4）と平年に比べて少ない（グラフ参照）。
- ② 黄色水盤への有翅虫飛来数は平年並みである。
- ③ 向こう一か月の気象は本種の発生を特に助長する要因とはならない。



2) カキ

(1) 円星落葉病

予報内容

発生地方

県内全域

発生量 (感染量)

平年並～やや多い

予報の根拠

①前年の発生は平年並みで、伝染源量も平年並みと考えられる。

②向こう一か月の気象は本病の発生にやや助長的である。

(2) カキミガ (第1世代)

予報内容

発生地方

県内全域

発生時期

平年並

発生量

平年並

予報の根拠

①前年の第2世代幼虫による被害は平年並みであり、越冬量は平年並みと考えられる。

②向こう一か月の気象は本種の発生を特に助長する要因とはならない。

3) 果樹全般

(1) カメムシ類

予報内容

発生地方

県内全域 (特にナシ無袋、カキ栽培地帯)

発生量

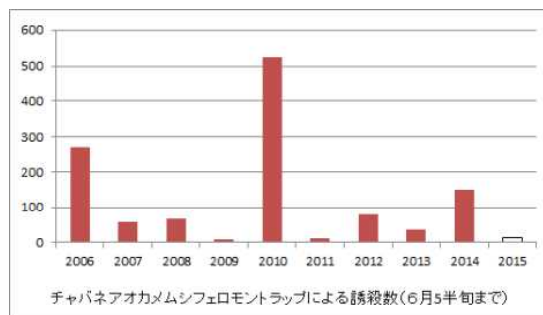
やや少ない

予報の根拠

①6月第5半旬までのフェロモントラップによるチャバネアオカメムシの総誘殺数は13頭 (平年228.1頭) とやや少ない。

②6月5半旬までの予察灯でのチャバネアオカメムシ、クサギカメムシ、ツヤアオカメムシの総誘殺数は23頭 (平年128.8頭) とやや少ない。

③向こう一か月の気象は本種の発生を特に助長する要因とはならない。



農薬の安全使用の徹底を！

- ・農薬の使用基準 (適用作物、使用量又は濃度、使用時期、総使用回数) を遵守する
- ・防除履歴 (使用日時と場所、作物名、農薬の種類と量) を記帳する。
- ・農薬散布時には周辺作物に飛散 (ドリフト) しないように注意する。
- ・水田で使用する農薬の止水期間を守る。
- ・有効期限切れ農薬は使用しない。
- ・散布後は散布器具の洗浄を徹底し、空き容器は正しく処理する。
- ・病害虫の発生状況を把握し、必要最小限の農薬使用に努める。

○病害虫防除所のホームページでは発生予察情報の他、各種情報を掲載しています。

島根県病害虫防除所

TEL 0853-22-6772

FAX 0853-24-3342

ホームページ

http://www.pref.shimane.lg.jp/industry/norin/gijutsu/nougyo_tech/byougaityuu/